

ヴァニョーニ述『天主教要解略』訳注（十八）

主なる神様の十戒の部（訳者補足 続の六）

A・ヴァニョーニ 述
葛谷 登 訳

二の一

内閣文庫所蔵になる林家本の漢籍の中に王豊肅、すなわちヴァニョーニ述『天主十誠解略』一卷（『改訂内閣文庫漢籍分類目録』、三二四頁）がある。これはヴァニョーニ述『天主教要解略』中の「天主十誠」の部分とその後「天主十誠解略」の部分を取り出して、新たに『天學十誠解略』という題名をつけて一冊の書として世に出されたものである。内閣文庫の同目録には、「明天啓四序刊（欽一堂）（同頁）とある。

同書には『天主聖像略説』という文章が付されている。作者の名は記されていない。『天主十誠解略』の後ろに置かれた文章であることから分かるように、この文章は内容的に十戒と深く関わっている。それは十戒が明末中国の思想世界においてどのような意味を有するものであるかというようなことなどを明

らかにするものである。『天主十誠解略』の部分が十四葉であり、他方『天主聖像略説』の部分は七葉である。分量的にも正編、補編の関係にあると言えないであろうか。

Nicolas Standaert 編『中国キリスト教ハンドブック』(*Handbook of Christianity in China*) 第一巻「六三五年～一八〇〇年」(Volume One: 635-1800) (Brill, 2001) には“Tianzhu shengxiang lieshuo” 天主聖像略説 (c.q. *Zaowuzhu chunxiang lieshuo* 造物主垂象略説, 1615, attributed to Xu Guangqi)” (六一五頁) とある。このことから『天主聖像略説』は『造物主垂象略説』と等しく同書の版本は題名を『造物主垂象略説』とするもののほうが多いように見える。以下では可能な限りこれらの版本を総称して『造物主垂象略説』とし、内閣文庫本については『天主聖像略説』という語を用いたい。一六一五年（万曆四十五年）に書かれ、

作者は徐光啓に帰せられていることが分かる。

ただこれには異なる見解があるようである。というのも徐宗澤『明清間耶穌会士訳著提要』中の『天主聖像略説』の項には「耶穌会士羅如望謹述。」(巻三「真教弁護類」)(上海世紀出版集団上海書店出版社、二〇一〇年、一三〇頁)とあるように、作者はイエズス会士 Joannes de Rocha (巻九「訳著者伝略」)(二七二頁)であるとされ、また「此書刻于一六〇九年、」(巻三)(二二二頁)とあるように、出版年は一六〇九年(万暦三十七年)とされているからである。

一九四〇年に徐宗澤が徐家滙蔵書楼で書いた同書の「凡例」の「六、」には「訳著者之行実当為読者所欲知、故從費頼、之司鐸、所著之 Pfister, Notices bibliographiques et bibliographiques fur les Jesuites etc.」書中摘編各訳著者之伝略。」とある(傍点、訳者注。特に注記しない限り、以下同じ)。つまり、徐宗澤の『明清間耶穌会士訳著提要』の巻九「訳著者伝略」は「費頼之」、すなわちフィステル Pfister の『明清(一五五二―一七七七) 中国イエズス会士列伝及び書目』(Notices biographiques et bibliographiques sur les Jésuites de l'ancienne mission de Chine 1552-1777, tome I, II, 1932, 1934, Variétés Sinologiques no.59, 60) に負っているのである。

ローシヤ Rocha — フィステルの書には 'Jean de Rocha' (第一巻、六十七頁)とあり、また日本基督教団出版局『キリスト教人名辞典』には 'Rocha, João de' (一八七九頁)とあるが、前掲『中

国キリスト教ハンドブック』には 'João da Rocha' (二五一頁等)

となっている。ブラジル在住のオペレート会士シエニヴァウド神父様のご教示によれば、「昔のポルトガル語は、スペイン語ともっと近いものでしたから、そのように違っているところがあります。…文法的に *da* が正しいです。発音も「ダ・ローシヤ」になります。」ということであるので、後者の綴字に従った。記して感謝す—は『明清中国イエズス会士列伝及び書目』では十八番めに挙げられている。第一巻の六十七頁から六十九頁までが彼についての記述である。『造物主垂象略説』については彼の著作の二番めとして第一巻の六十九頁に次のような解説が書かれている。

2. 天主聖像略説 *T'ien-tchou cheng siang liouchou*, "Explication abrégée des saintes images du Maître du Ciel", 1 vol., 1609. Elle se trouve indiquée dans le catalogue des manuscrits chinois de Berlin par Klaproth, t. II, p.54. C'est l'ouvrage que Machado signale par ces mots: "Practica de rezar o Rosario em que explica as cinco misterios dolorosos: *com es imagens da Paixao de Senhor*", Manière pratique de réciter le Rosaire, avec les images de la Passion. (Sommervogel, *Bibliothèque*, t. VI, col. 1931. — Cf. ci-dessus, p.65, n°2.)

この部分は中華書局から出されている「中外関係史名著訳叢」シリーズ中の馮承鈞訳『在華耶穌会士列伝及書目』上冊(一九九五年)の七十三頁では次のように抄訳されている。

(二)《天主聖像略説》一卷、一六〇九年本、克拉普羅特(Klaproth)撰柏林漢文抄本書録卷二、五四頁有著録。(索黙爾沃熱爾《書目》、卷六、一九三二欄)。

また梅乘騏、梅乘駿訳『明清間在華耶穌会士列伝(一五五二—一七七三)』(天主教上海教区光啓社、一九九七年)の八十二頁では次のように抄訳されている。

二、《天主聖像略説》、一卷、刻于一六〇九年。在 Klaproth, t. II, p.54, Berlin. 的中文書目中、有此書名。這是附有耶穌受難像的玫瑰經解說。(Sommervogel, Bibliothèque, t. VI, col. 1931)

フランス語原文と漢訳文によれば、『造物主垂象略説』一卷は一六〇九年(万曆三十七年)に世に出ており、Klaproth 編になるベルリンの漢籍抄本—原文の‘manuscripts’は「手稿本」とも訳すことは可能なであろうか—目録の第二巻、五十四頁に認められるものである。それにまた『明清(一五五二—一七七三)中国イエズス会士列伝及び書目』第一卷六十五頁の三番めに挙げられたロンゴバルドの『念珠黙想規程』と関係があるようである(同箇書には“(Cf. ci-dessous, p. 69, n.2).”とある)。更に Machado はロザリオの祈りの実践の中の苦しみの五玄義を主の受難の像を用いて説明したものととして同書を示している(六十九頁) —ブラジル在住のオペレート会士ジュニヴァウド神父様のご教示によりポルトガル語文の意とするところを追いかけてみた。記して感謝す—。

要するに、『明清(一五五二—一七七三) 中国イエズス会士列伝及び書目』の原文の記すところによれば、主の受難の像を手助けにして「ロザリオ十五玄義」(Quindecim Mystera Rosarii) (小林珍雄編『キリスト教用語辞典』東京堂出版、一九五四年、三八七頁)のうちの「苦しみの玄義」(Dolorosa mysteria) (同書、同頁)の祈りを唱える時に使われる解説として、『造物主垂象略説』は用いられたということではないであろうか。

ところで『明清(一五五二—一七七三) 中国イエズス会士列伝及び書目』に登場する Klaproth と Sommervogel はどのような人物であるのだろうか。

クラブロート Klaproth については『岩波 世界人名大辞典』(岩波書店、二〇一三年) 第一分冊に、「クラブロート Klaproth, Heinrich Julius 一七八三—一〇一—一八三五、八二八」(八二—三頁)という項目がある。それによれば、クラブロートはドイツの東洋学の研究者で、ドレスデン大学の学生時代に『Asiatisches Magazin』を始めた。その後、ロシアの科学アカデミーの外国人の会員となった。ロシアではカフカース地方を実地に調べて、『Reise in den Kaukasus und nach Georgien in den Jahren 1807 und 1808』二巻に結実させた。ロシアを離れた後に、パリに移り住んだ。著作としては他に、『Asia polyglotta』(一八二三年)や『Memoi res re larifs a l'Asie』(一八二四年—二八年)等がある。また、漂流民の大黒屋光太夫の同行者の協力を得て日本語の語彙集を作成したようである(同頁)。

フィステル *Pfister* は『明清 (一五五二—一七七七) 中国イエズス会士列伝及び書目』第一巻の「序」(Introduction) によれば、一八三三年に生まれ、一八六七年に来華し、一八九七年に世を去っている (XVII 頁)。彼はクラブプロートの逝去二年前にこの世に生を享けたわけである。このことからフィステルとクラブプロートとの間には直接的な関係がなかったであろうことが分かる。しかし『岩波 世界人名大辞典』に「ついでリトニアのヴィルナ大学におけるアジア語学校の付設に参加後ロシアを去り、のち教授資格を得てパリに定住、同地で没。」(第一分冊、八一三頁) とあることから、当時東洋学者として著名であったであろうクラブプロートのパリへの移住と同地での逝去とがフィステルの時代にあってもなおフランスでの名声を連綿と続かせ得たのであろうか。クラブプロートという稀代の東洋学の研究者の存在を通して当時のヨーロッパ、少なくともドイツとフランスにおける東洋学研究は国境の垣根を越えて行なわれていたことが窺われるように思う。

他方、*Sommervogel* については『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局、一九八六年) に、石井祥裕氏執筆の「ゾンマフォーゲル、カルロス *Sommervogel, Carlos* 一八三四・一・八一—一九〇二・五・三二」(八三五頁) という項目がある。また研究社『新カトリック大事典』第三巻 (二〇〇二年) に、尾原悟氏執筆の「ゾンメルフォーゲル *Sommervogel, Carlos* (一八三四・一・八一—一九〇二・五・四)」(九二二頁) という項目がある。

両者の記述に大きな差異はないが、イエズス会士で司祭である尾原氏の執筆された『新カトリック大事典』のものによれば、ゾンメルフォーゲルは「イエズス会員、書誌学者。フランスのストラスブルに生まれる。一八五三年イエズス会に入会し、一八六六年司祭に叙階。一八六二年以来その死まで、イエズス会の機関誌 (*Etudes*) の編集に携わり、一八七二—一八〇年は編集長として貢献した。…また、バックカー兄弟…の『イエズス会著作家叢書』(*Bibliothèque des écrivains de la Compagnie de Jésus, 1853-61*) の編集に協力。兄弟の死後はその仕事を受け継ぎ、『イエズス会書誌』全九巻 (*Bibliothèque de la compagnie de Jésus, 1890-1900*) を編集・発刊した。」(同頁) という人物である。書誌学者としてすぐれていただけではない。彼は一時期、イエズス会のフランス管区長補佐—現在、日本イエズス会管区長補佐である山岡三治神父様によれば、「イエズス会では伝統的に『補佐』は *Socius* と言い、秘書は別に存在します。」ということである。記して感謝す—の務めをなした(同頁)。このことから、彼が会の運営という面からも重要な働きをした人物であることが分かるであろう。

前掲『明清間在华耶穌会士列伝 (一五五二—一七七七)』所収の「費頼之神父伝略 (代前言)」によれば、フィステルはゾンメルフォーゲル等と親密な関係を持ち、彼らを介して徐家匯藏書楼に価値ある資料を集め、他方彼らに参考となる資料を数多く与えたようである (十二頁、十四頁)。このことからフィ

ステルはゾンメルフォーゲルから明、清の時代に中国を訪れたイエズス会の宣教師に関する知識を得たのではないかと思われる。『明清（一五五二―一七七七）中国イエズス会士列伝及び書目』第一巻の六十九頁に記された“Sommervogel, *Bibliothèque* t. VI, col. 193”という語句はそのことを物語るものではないであろうか。そしてここに挙げられた“*Bibliothèque*”という文献は、前掲『新カトリック大事典』第三巻の“ゾンメルフォーゲル”という項目の中に挙げられた二つの書物のうちゾンメルフォーゲルが編集者として世に送った『イエズス会書誌』（*Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*）のことを指しているのではないだろうか。

以上、『造物主垂象略説』の作者をイエズス会宣教師ローシャとする徐宗澤の『明清間耶穌会士訳著提要』と徐宗澤が『訳著提要』作成の上で依拠したとされるフィステルの『明清（一五五二―一七七七）中国イエズス会士列伝及び書目』の記述について極めて不完全ながら追いかけてみた。

次に『造物主垂象略説』の作者を徐光啓と見なす立場のものについて見てみたい。

朱維鐸、李天綱主編になる『徐光啓全集』全十冊が二〇一〇年に上海古籍出版社と上海世紀出版股份有限公司から出版された。そのうちの第九冊の李天綱編『徐光啓詩文集』の中に『造物主垂象略説』が収められている（二三八〇―二三八五頁）

その文章の冒頭に掲げられた「造物主垂象畧説」という題名の下に「①」という注の印が付されている（二三八五頁）。同頁末尾のその注には、「増訂者按：據巴黎法國國家圖書館藏刻本、轉見於《天主教東傳文獻》（三編）、臺灣學生書局、一九七二年。本文提到「天主降生於一千六百一十五年之前」、寫作之年應即爲一六一五年。本文歷次徐光啓集未曾收錄、考證參見李天綱《造物主垂象畧説》校釋》、載《跨文化的詮釋：經學和神學的相遇》、新星出版社、二〇〇七年。」とある。この注によれば、『徐光啓全集』第九冊所収の『造物主垂象畧説』の文章はパリ国立図書館所収本に拠っているようである。

更に『造物主垂象畧説』は、『天主教東傳文獻三編』第二冊（臺灣學生書局）にも収められている（五四七頁―五六四頁）。一九八四年に再版された『東傳文獻三編』の第六冊に附された奥付には、「梵諦岡教廷圖書館藏本」とある。全六冊の影印はすべてヴァアティカン図書館所蔵本に拠っているということである。果たして第一冊の冒頭の頁には蔵書印と思しきものが載っている。ローマ字で“BIBLIOTECA APOSTOLICA VATICANA”とある。これは「ヴァアティカン宮殿内にある、ヨーロッパで最も重要な図書館の一つ。特に写本類の収集で知られる。」（尾原悟「ヴァアティカン図書館」研究社『新カトリック大事典』第一巻、五八九頁）とところのヴァアティカン図書館（Biblioteca Vaticana）を指すのである。

『造物主垂象畧説』の影印が掲載されている『東傳文獻三編』

第二冊の五四七頁は同書の前表紙の影印である。そこには左側に「造物主垂象略説」と書かれた題簽と思われるものが写っている。その右側には筆記体のローマ字で「Borgia…」とあり、その下に数字で「三三四」(二二)とある(同頁)。

ペリオ (Paul Pelliot) 編、高田時雄校訂・補編、郭可訳『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄』(中華書局、二〇〇六年)の「目錄」には、²「2. Borgia Chinese」となっている。二十三頁の見出しは、²「FONDS BORGIA CHINOIS (BORGIA CHINESE) 手寫本與刻印本」となっている。このうち「手寫本與刻印本」の部分は原書の *Inventaire sommaire des manuscrits et imprimés chinois de la Bibliothèque Vaticane, a posthumous work by Paul Pelliot, Revised and edited by TAKATA Tokio (Istituto Italiano di Cultura, Scuola di Studi sull'Asia Orientale, Kyoto, 1995)* では、²「MANUSCRITS ET IMPRIMÉS」(七頁)とある。つまり、ヴァティカン図書館の中には「ボルジア・コレクション」と言うべき蔵書があり、そこには手稿本や写本並びに刊本の類の漢籍が収められているということがある。

『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄』には三種の『造物主垂象略説』が載っている。そのうちの二部は「2. Borgia Chinese」(二十七頁)に、また残りの一部は「8. Raccolta Generale Oriente」(七十七頁)——「一般コレクション——東洋」の意か——に書誌情報が記されている。

前者の二つのうちの二つは「Borgia Chinese」の三三四の第二十一番に、「Zaowuzhu chuxiang lueshuo 《造物主垂象略説》

：造物主圖像簡單描述。八頁。卷首云：吳淞徐光啓梓。篇末是楊廷筠的長篇後記。」(四十五頁)とあり、またもう一つはその次の第二十二番に、「同一作品、七頁、篇末是楊廷筠的後記。」(同頁)とある。そして後者は「Raccolta Generale Oriente」の二二一の第六番に、「Tianzhu shengxiang lueshuo 《天主聖像略説》(封面上題名)。章節前的題目是 Zaowuzhu chuxiang lueshuo 《造物主垂象略説》。吳淞徐光啓著、篇末是楊廷筠的按語。參見 Borgia. N°334-21。」(一〇五頁)とある。

これら三部はいずれも体裁を異にしている。第一の『造物主垂象略説』には後ろに楊廷筠の文章が附されており、第二のもは第一のものと本文は同じであるけれども後ろに楊廷筠の文章はない。そして第三のものは「封面」に『天主聖像略説』という題名があり、本文の前に『造物主垂象略説』という題名が書かれ、後ろには楊廷筠の文章が附されている。

このうち第三のものについて「封面上題名」に当たるフランス語原文は、「sur le couverture」(前掲 *Inventaire sommaire*、七十七頁)とある。ここには中国語訳文の「題名」に当たるフランス語はない。また「章節前的題目」に当たるフランス語原文は「Le titre en tête du chapitre」(同書、同頁)とある。中国語訳はほぼ原文そのままであろう。

更にまた、「封面」という訳語に当たるフランス語の原文は、「couverture」であるから、前表紙に題名が書かれている、或いは題簽が貼つてあると解することも出来るであろう。この「封

面」という語は日本の書誌学では長澤規矩也編著『図書学辞典』(汲古書院、一九七九年)によれば、「見返又は扉と同義の漢語。」(九十頁)を指すようである。しかし、現代中国語では『中日大辞典』(大安、一九六八年)によれば、「書簡・雑誌・刊行物などのおもて表紙。」(四四三頁)を指すようである。

従って第三のものについては前表紙に題名が書かれている、或いは題箋が貼ってあるとも考えられるであろう。

また同『目録』では第一のものの項目の箇所『造物主垂象略説』の内容について造物主の画像を簡単に説明したものとしている。しかし実際は画像そのものを中心に記述した内容になっていない。

以上から、『天主教東傳文獻三編』第二冊所収の『造物主垂象略説』の影印は前表紙に記された手書きの文字と数字から見ても、ヴァティカン図書館所蔵になる「ボルジア漢籍コレクション」(Fonds Borgia Chinois)」の三三四の第二十一番であることが分かる。

次にパリ国立図書館所蔵になる『造物主垂象略説』について見てみることにしたい。モリス・クーラン (Maurice Courant) 一八六五〜一九三五。リヨン大学教授。外交官の立場でアジア東部を訪れた(村山正雄「クーラン」平凡社『アジア歴史事典』第三巻、六十五頁) — の『パリ国立図書館所蔵漢籍解題目録』(Catalogue des livres chinois, coréens, japonais, etc. Paris, 1912) の復刻版(科学書院、一九九三年)の【本篇】に収めら

れた『目録』の第八冊 (huitième fascicule) の第十八章は「カトリック」(Catholicisme)となっている(一三四五頁—一五三二頁)

ここには全部で七部の『造物主垂象略説』が記載されている。第一のものは六六九〇の『天主聖像略説』(一三四五頁)、第二のものは六六九一の『天主聖像略説』(同頁)、第三のものは六六九二の『天主聖像略説』(一三四六頁)、第四のものは六六九三の『天主聖像略説』(一三四七頁)、第五のものは六六九四の『造物主垂象略説』(一三八二頁)、第六のものは六六九五の『造物主垂象略説』(一三八三頁)、第七のものは七二五〇の『造物主垂象略説』(一四二五頁)、そして第七のものは七二七四の『造物主垂象略説』(一四三二頁)である — 以上は『パリ国立図書館所蔵漢籍解題目録』(補遺篇I)解説・一覧表』(科学書院、八〇七頁、八〇八頁、八六〇頁)に拠った。

以下に『目録』に書かれたこれら七部のものの書誌情報について見てみることにする。

第一の六六九〇は、“Vie abrégée de Notre Seigneur. Par Siu Koang-khi Tseu-si-en, docteur en 1604(+1633); texte en langue vulgaire. Note finale par Yang Thing-yun, de Oou-lin (cf. n. 1097). 8 feuillets. Grand in-8. I vol. cartonnage (provenant de la Société de Jésus) Fournon 261. (p. 1345) とある。

これは大略次のような内容ではないかと思われる。すなわち、「主イエスの生涯を簡略に説明したもの。著者は徐光啓(字は子先。一六〇四年の進士。一六三三年に帰天)字については王

重民『徐光啓』(上海人民出版社、一九八一年、一頁)によつて確かめた)。原文は俗語体。武林の楊廷筠による注解が付く。八葉。一〇九七の『楊淇園先生超性事蹟』を参照されたい。一卷。フルルモン—Fournont, Etienne。[ラ]Stephanus 一六八三、六、二三—一七四五、一二、一八。フランスの東洋学者」(『岩波 世界人名大辞典』第二分冊、二四五九頁。また石田幹之助『歐人の支那研究』共立社、一九三二年、二二〇頁—二二三頁に詳細な記述がある。) —の二六一番—これは『中國官話』(*Linguae Sinorum Mandarinicae hieroglyphicae Grammatica duplex, Latine, & cum Characteribus Sinensium*, 1742) (同書、一二二頁—一二三頁—『歐米・ロシア・日本における中國研究』総合索引) 科学書院、一九九七年、一二二頁)を指しているであろう。愛知大学豊橋図書館所蔵本の四六三頁—四六四頁に記述があった。』というものである。

第二の六六九一のIは、"Double"(p.1345)とのみある。『パリ国立図書館所蔵漢籍解題目録(補遺篇I)』(科学書院、一九九四年)の坂田祥伸「解説」の後の「凡例」によれば「Double」とは、同一の書籍を指す(一頁)とあった。

第三の六六九二のIはIIとごまに、"Double du n° précédent." (p. 1346)とある。とすればこれは六六九一のIと「同一の書籍」であるであろう。

第四の六九一五のIVは『造物主垂象略説』という題名の下に更に『天主聖像略説』という題名が記された後に、そこには、

"Traité sur l'image du Créateur. Attribue au P. da Rocha, non daté. Cordier, Imprimerie sino-européenne 247. 7 feuillets. Caractères du genre cursif." (p.1382) とある。

これはあらまし次のような内容ではないかと思われる。すなわち、「造物主の聖画像に関する概論。著者はロシアに帰せられてゐる。執筆の時期は記されていない。コルデイエー「一八四九—一九二五。フランスの東洋学者。…書誌学、外交史や東洋交渉史の諸領域に多くの業績を残した。」(山本達郎「コルデイエ」平凡社『アジア歴史事典』第三卷、四三二頁)。他に礪波護「コルデイエ」大修館『東洋学の系譜「欧米篇」』五十九頁—六十九頁に詳しい)の『十七・十八世紀支那吉利支丹版考』(*L'imprimerie sino-européenne en Chine : bibliographie des ouvrages publiés en Chine par les Européens au XVIIe et au XVIIIe siècle*—前掲『総合索引』、九十四頁) 第二四七番。草書体(草) (Caractères du genre cursif)。」とごまものである。

第五の六九一六のIVは、"Double du n° précédent, art. IV" (p. 1383) とある。つまり、六九一六のIVは六九一五のIVと「同一の書籍」であるということであろう。

第六の七一五〇のIIIは、"Traité sur l'image du Créateur. Feuillet 119 à 124. N° 6915, art. IV. Petit in-8. Manuscrit. I vol. cartonnage. Nouveau fonds 3109." (p.1425) とある。

これはおおよそ次のような内容ではないかと思われる。すなわち、「造物主の聖画像に関する概論。一一九葉—一二四葉。

六九一五のIV。写本。一卷。『新コレクション』三二〇九。」というものである。

第七の七二七四のXXは、『Traité sur l'Image du Créateur. Feuilles 82 à 89, N° 6915, art. IV. (p. 1433)とある。これは、「造物主の聖画像に関する概論。八二葉〜八十九葉。六九一五のIIIと同じ。」という内容であろう。

これら七部の書誌情報によれば、六六九〇と六六九一のIは同一の版本であり、題名は『天主聖像略説』で、著者は徐光啓とし、楊廷筠の注解が付いている。六九一五のIVは題名が『造物主垂象略説』と『天主聖像略説』二つあり、著者はローシヤに帰せられている。七一四九のIIIは題名が『造物主垂畧説』である。

このうちの七一五〇のIIIは体裁が六九一五のIVの『造物主垂象略説』と同じではないかと思われる。しかもこれは七一五〇のIの『醒迷篇』(二四二四頁)と七一五〇のIIの『徐相國辨學奏疏』(同頁)との合本である。この『醒迷篇』はその前の七一四九の『醒迷篇』と本文を同じくしている(『Texte analogue: p.1424』。七一四九に記された書誌情報によれば、『A la fin on lit: gravé par Lo koang-phing à l'eglise King-kaok(1667)。(p.1424)とあるように、七一四九の『醒迷篇』は一六六七年に出版されたようである。一六六七年は康熙六年に当たっている。それは明朝が完全に滅亡し、康熙帝が清朝の基礎固めの仕事に携わっていた時期であろうか。

従って七一五〇のIIIの『造物主垂像畧説』の収められた七一五〇のIの『醒迷篇』の出版も同時期、或いは同時期以降と見てよいのではないであろうか。加えてこの『造物主垂像畧説』―傍点、訳者注。以下、特に注記しない限り同じ―は『目錄』の文字が誤植でなければ他のものと異なり、題名の一字が「象」ではなく「像」となっている。これは『醒迷篇』と『徐相國辨學奏疏』と合わさって一冊の本として出版される編集過程の中で起きた事象であろうか。これは校定の上で万全の精確さを期すことが出来ない状態で三種の本を合わせて一冊の本として出さざるを得ないところの切迫した事情が存在していたと想像する余地はないであろうか。

七一四九の『醒迷篇』が世に出たとされる一六六七年(康熙六年)の顧保鶴編著『中國天主教史大事年表』(光啓出版社、一九七〇年)の箇所には、「帝始親政 監禁廣州之教士、計道明會士三人、方濟各會士一人、耶穌會士十九人、共二十三人。」(三十頁)とある。これによれば、一六六七年は康熙帝が親政を開始した年であり、この年には広州で宣教活動に従事していたドミニコ会士三名、フランシスコ会士一名、イエズス会士十九名が監禁されたのであった。同年表によれば、その三年前の一六六四年には楊光先によって「曆獄」が引き起こされ、イエズス会のアダム・シャルは一時期、獄につながれた。翌一六六五年にシャルは釈放されたが、各省に分散していた宣教師は北京に集められ監禁された後、広州に護送され、次の年の

一六六六年にシャルは地上を去ったのであった（二十九頁―三十頁）。

中国のカトリック教会は同年表によれば、明朝が倒壊し清朝が成立した後、順治帝の時代（二六四四年―一六六一年）にあって宣教において着実に前進した観があった（二十五頁―二十九頁）。けれども、康熙帝の時代に入りほどなくして後ろに押し戻そうとする対抗の力に遭遇したのであった。このとき中国のカトリック教会は自らの信ずるところの内容を公に表明するだけでなく、その正統性を名末清初の思想の座標軸を用いて説明する必要に迫られた。そのような状況下で一冊の本として編集し出版されたものが、七一五〇のIの『醒迷篇』と七一五〇のIIの『徐相國辨學奏疏』と七一五〇のIIIの『造物主垂像畧説』ではなかったのではないであろうか。この一冊の本は清代中国におけるキリスト教カトリックの受容の思想的意義を考えるうえで重要な文献ではないかと想像する。

ただ版本の異同という観点から見た場合、七一五〇のIIIの合本化された『造物主垂像畧説』の有する資料的価値は、パリ国立図書館所蔵のさほど高くはないであろう。七一五〇のIIIは思想的価値と書誌学的価値が大きく乖離しているように思われるのである。

第二の六六九一のIと第三の六六九二のIは第一の六六九〇と「同一の書籍」ではないか、また第五の六九一六のIV、第六の七一五〇のIIIと第七の七一七四のXXは第四の六九一五のIVと

「同一の書籍」の類ではないかと思われるので、最終的に第一の六六九〇と第四の六九一五のIVと比較検討すればよいのではないであろうか。

そこで第一の六六九〇と第四の六九一五のIVを比べてみると、前者は作者が徐光啓であり、本文の後に楊廷筠の文章が附せられており、他方後者については作者はローシヤに帰らせられている。また六九一五のIVは、Iの『性靈説』、IIの『推驗正道論』、Vの『鴉鷲不並鳴説』、VIの『靈魂道體説』とVIIの『聖教規誡箴贊』と合わさって一冊の書となっている。このうちブリオ (Buglio) の『性靈説』（前掲『明清間耶穌会士訳著提要』、一五四頁）が最も新しいものであるから、この合本は一六〇〇年代の後半に出たものであろうか（同書「書名表」の三三六頁―三三九頁を参照）。

『造物主垂像略説』は他にローマのイエズス会文書館 (Archivum Romanum Societatis Iesu) にも所蔵されている。Albert Chan, S.J. の著になる『ローマ・イエズス会文書館漢籍及び史料』 *Chinese books and documents in the Jesuit archives in Rome—a descriptive catalogue Japonica-Sinica I-IV* (An East Gate Book, 2002) のIの一四〇の箇所（一八五頁）に『造物主垂像略説』が取り上げられている。それによれば、題名は『聖像略説』、或いは『造物垂象略説』であり、「吳淞徐光啓述」になる一卷である。『造物垂象略説』は俗語体で書かれた要理書 (catechism) である。クーランの目録の六九一五のIVの箇所

は作者をローシャに帰している。徐光啓はローシャから洗礼を授けられ、二人の間には親交が続いたので、『造物垂象略説』はローシャが口述したものを、徐光啓が筆録して書き上げた可能性があるというものである（同頁）。

Albert Chan の同書には他にクラーンの目録の七一五〇のⅢと七一七四のXXが言及されている。七一五〇のⅢについてはすでに拙文の中で取り上げた。七一七四のXXについてはここでもう少し詳しく取り上げたい。

これは七一五〇のⅢと同様に編集によって他の文章と合わさって一冊の本をなしている。この場合、他の文章とは七一七四のⅠの「論許眞君」、Ⅱの「論玄門」（以上、同目録、一四三〇頁）、Ⅲの「綱目總論」、Ⅳの「論破迷」、Ⅴの「論懺悔」、Ⅵの「論生死賞罰惟一天主 百神不得參其權」、Ⅶの「論人錯認蒼天爲主」、Ⅷの「論梓童 (Sic) 帝君及三元 三品三官大帝」、Ⅸの「論關雲長」、Ⅹの「論輪廻」（以上、同目録、一四三二頁）、Ⅺの「論巫人」、Ⅻの「論佛種」、Ⅼの「論老君行述」、Ⅽの「論觀音」、Ⅾの「論眞武」、Ⅿの「論唐三藏」、ⅰ「論戒殺」、ⅱの「論人迷信風水地理」、ⅲの「論報母齋」（以上、同目録、一四三二頁）、ⅳの「論雷」、ⅴの「論神像來歴」（以上、同目録、一四三三頁）を指す。

これらの文章が合わさって一冊の本となったものは全体として仏教や道教を批判することに主眼が置かれているように見える。ここには出版の時期を明示するものはないようである。版

本の異同に注目する立場に立てば、この一冊の書物の一部をなす七一七四のXXの『造物主垂象略説』は出版の時期が明確ではないという点において七一五〇のⅢよりも資料としての取り扱いが難しいのではないであろうか。

以上、『造物主垂象略説』についてヴァティカン図書館所蔵のもの、パリ国立図書館所蔵のもの、及びローマ・イエズス会文書館所蔵のものを目録の面から取り上げた。

作者については、ヴァティカン所蔵のものはいずれも徐光啓であり、パリ所蔵のものにはこれを徐光啓とするものとローシャとするものの二種類あり、イエズス会文書館所蔵のものは徐光啓とするものであった。

この本の内容について言えば、前掲『ローマ・イエズス会文書館漢籍及び史料』の「これは俗語体で書かれた簡明な要理書である。」（“This is a simple catechism written in the vernaculars.”, p.185）という記述が的確に内容を捉えているように思われる。というのも、この本は『造物主垂象略説』という題名そのものから、演繹的に想像される内容とは隔たりがある。「要理書」(catechism) という捉え方は本文を仔細に読んで初めてなされたものであるだろう。

この本が要理書であるとすれば、その文章の有する意義は小さくはない。果たして、この文章は康熙帝の時代に中国のカトリック教会が宣教において逆境に置かれたときに弁明のために

れている（前掲『東傳文獻三編』、五六二頁―五六三頁）。

二つめのパリ国立図書館所蔵の漢籍のマイクロフィルム―橋大学図書館所蔵になる―からプリントしたものである。これはクーランの目録の六九一五のIVに当たるものである。表紙に貼られた題簽には、「性靈説 聖教約徴 正道論 天主聖像畧説 鴉鸞不並鳴説 灵魂道体説 規箴箴贊」と書いてある。行格は九行×二十字である。本文の最初に「造物主垂象畧説」と書かれた後、次の行に「耶穌會士謹述」と書かれている。全部で六葉半である。文字は極めて鋭角的である。この文字についてクーランは“Caractres du genre cursif.”（パリ漢籍目録、一三八二頁）と評したのである。訳者はこれを「草書体」と間に合わせて訳してみたけれども、実際は楷書である。走り書きのような類ではない。

この『造物主垂象畧説』という文章の次に置かれているものは楊廷筠を作者とする『鴉鸞不並鳴説』という文章である。行格は九行×二十字である。文字は鋭角的であり、『造物主垂象畧説』の文字と同じ外観を呈している。

この『造物主垂象畧説』と『鴉鸞不並鳴説』は体裁が同じである。二つの文章はもともと合わさって一冊の本として出版された可能性があるのではないだろうか。

三つめのベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin―ユルゲン・ゼーフェルト、ルートガー・ジュレ著『ドイツ図書館入門―過去と未来への入り口』〔伊藤白訳〕日本図書館協会、

二〇一一年、五十頁―五十一頁)の所蔵本についてはその画像が、URLの http://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht?PPN=PPN3308101807&PHYSID=PHYS_0003 に掲載されていることをドイツ在住の神言会士で *Monumenta Serica* の編集責任者であられる Zbigniew 神父様よりご教示いただいたので、それをプリントした。

表紙に貼られた題簽には、「天主聖像略説」と書いてあり、更にその右下に細字で「附鴉鸞不並鳴説」と書いてある。行格は九行×十九字である。本文の最初に「造物主垂象畧説」という題名が書かれた後、次の行に「耶穌會士謹述」と書かれている（五頁）。全部で七葉である。また、本文の後には細字で楊廷筠の文章が附されている（七葉裏―八葉表）。文字は鋭角的ではない。均一に同程度の大きさが保たれ、用いられている漢字の画数も一部やや少ないように見える。木版本の字と様相を少し異にしているようにも見られるので、この版が、「比較的小資本で小部数を迅速に印出することができる活字印刷」（藤本幸夫『概論』朝鮮本と蓬左文庫』『日韓国交正常化50周年記念 豊かなる朝鮮王朝の文化―交流の遺産―』名古屋市蓬左文庫、二〇一五年、五頁）である可能性を考えることは出来ないであろうか。

四つめの内閣文庫所蔵本を写真複写したものについて見ると、表紙には題簽はなく、そのまま表紙の上に左側に右から「天主十誠解略」、そして「天主聖像畧説」という順序で題名が書

かかれている。行格は九行×二十字である。本文の最初に「天主聖像略説」という題名が書かれているのみで、次の行には作者に関する記述は見当たらない(一葉表)。

字に関しては、ここで用いられている字は『天主十誠解畧』の中で用いられている字とは対照的である。『十誠解畧』は木版の字の相を呈するのであるけれども、『聖像略説』は規格化された字が繰り返し用いられるように見えた。『聖像略説』もまた活字印刷の可能性はあるのであろうか。というのも『聖像略説』に用いられた字は一部鋭角的なものが見受けられるからでもある。

訳者はこのような観点から二〇一六年二月二十九日に内閣文庫を訪れて原本に当たってみた。それにより知り得たことは、『天主十誠解畧』の印刷に用いられた紙と『天主聖像略説』の印刷に用いられた紙は同質のものではないかということである。もともと木版と活字では圧力の関係で印刷に用いられる紙は異なるのではないかと思われるので、このことは意外であった。『天主聖像略説』が活字印刷である可能性は低くなるのであろうか。

仔細に見てみると規格化された同一の字と想像していたものが互いにわずかに違っているようにも見えた。今度は、内閣文庫のものは活字印刷に似た木版印刷ではないか、というふうにも思えて来たのである。

『造物主垂象略説』には、「天主降生于・・・年之前」という

文句がある。その箇所について、ヴァティカン図書館本は「天主降生于一千六百一十五年之前」(五葉表)とあり、パリ国立図書館本(六九一五のIV)は「天主降生于一千六百一十五年之前」(四葉裏)とあり、ベルリン国立図書館本は「天主降生于一千六百一十五年之前」(五葉表)とある。独り内閣文庫本は「天主降生于、千、六、百、一、十、九、年、之、前」(四葉裏)とある。

内閣文庫本の『天主聖像略説』が金属活字ではなく、木活字によって出版された可能性はないのであろうか。木活字のものは金属活字のものより印刷時にかかるであろう圧力が軽くすむように感ぜられ、また活字印刷であれば部分的な字句の変更が木版印刷より遙かに容易ではないかと考えられるからである。いづれにせよ、中国印刷史に通ぜぬ訳者の憶測の域を出るものではないが、張秀民、韓琦『中国活字印刷史』(中国書籍出版社、一九九八年)第二章「明代木活字的發展与金属活字的盛行」によれば、明代には木活字と金属活字による印刷が行なわれ、内閣文庫本が出版された地の福建では双方が進展を見たようである(二十六頁―四十九頁。特に、二十八頁、四十二頁―四十五頁)。

また、内閣文庫本の場合、本文の出しの部分¹が他と異なっている。

上邊供敬的、是

天主、即大西洋、與天下萬國、所稱 陡斯、

(一葉表)

これは、「上にあるわたしたちが敬い奉る存在は『天主』である。この『天主』はすなわち、大西洋の国々と世界の国々が Deus と称するところのものである。」というほどの意味であろうか。

これに対して他の三種はいずれも次のようになっている。

造物主者西國所稱

陡斯此中譯爲

天主

(一葉表)

これは、『造物主』とは西洋の国で Deus と称するところのもので、中国語に訳せばすなわち、『天主』である。」というほどの意味であろうか。

両者の大きな違いは、内閣文庫本では Deus を信ずる主体が西洋を含めた、中国の他の世界の人間であるに比し、他の三種はそれが西洋の人間に限定されていることである。内閣文庫版の言い表わし方に神学的な考察の深まりを見て取れるのではないであろうか。

五つめのローマのイエズス会文書館 (Archivum Romanum

Societatis Iesu) 所蔵本の *Japonica-Sinica I* の第一四〇番 (前掲

『ローマ・イエズス会文書館漢籍及び史料』、一八五頁) について見ると、前表紙には「聖像畧説」と書かれた題簽が貼られ、その右下に小さく「附鴉鷺説」と書かれている。行格は八行×十八字である。本文は八葉半で、後ろに細字で楊廷筠の文章が

附されている。本文の最初に「造物主垂象畧説」という題名が書かれ、次の行に「吳淞徐光啓述」と書かれている。

六つめのパリ国立図書館 (Bibliothèque Nationale) の所蔵本漢籍第六六九〇についてはその画像が、URL の <http://archivesmanuscripts.bnf.fr/cdc.html> に掲載されていたので、それをプリントした。前表紙には「天主聖像略説」と書かれた題簽が貼られ、その右下に小さく「附鴉鷺説」と書いてある。ただしこの「附鴉鷺説」の上に縦に線が引かれている。実際、第六六九〇には「鴉鷺不並鳴説」は附されていない。行格は九行×十九字である。全部で七葉である。本文の後ろには細字で楊廷筠の文章が附されている。本文の最初に「造物主垂象略説」という題名が書かれ、次の行に「吳淞徐光啓述」と書かれている。

以上、『造物主垂象略説』の六種の文章について見てみた。ヴァティカン図書館所蔵の *Borgia Chinese* の三三四の二十一番とパリ国立図書館の漢籍第六六九〇番は版本を同じくするものと思われる。他の四種は字体が異なっている。作者をローシャと明記するものはない。「耶穌會士謹述」と書くにとどめている。他方、作者を徐光啓とするものは「徐光啓述」としている。徐光啓はこの文章の著者ではなく、述者なのである。いずれにせよ、この文章の書き手を特定する根拠となり得るものを探し出すことは容易なことではないように思われる。

『造物主垂象畧説』は朱維錚・李天綱主編『徐光啓全集』（上海古籍出版社、二〇一〇年）全十冊の第九冊「徐光啓詩文集」巻九「雜文」の中に収められている（三八〇頁―三八五頁）。

主編者の一人李天綱の「『造物主垂象略説』校釈」という論文によれば、この文章は王重民『徐光啓集』（中華書局、一九六三年）と梁家勉『徐光啓年譜』（上海古籍出版社）には収められていない（李天綱『跨文化的詮釈：経学与神学的相遇』新星出版社、二〇〇七年、一九五頁）。しかしこれは「可見確是一篇徐光啓的未刊佚作。」（同頁）であるということである。徐光啓の作に違いないが、刊行されなかったということなのである。

何故収録されていないかと言えば、王重民によれば、「かの二編の文章は明らかに劉胤昌と許樂善の作であるのに、これらは徐光啓の名声に寄り頼んでこそ広く伝えられることが可能になるので、後人が偽わってこれらの文章を徐光啓の作としたのである。また国外には明清の時代に編集出版された『聖教規誡箴贊』一巻がある。そこには同様に贋作の可能性のある何篇もの贊文が入っている。これにもまた徐光啓の名が冠せられている。これらはみな相当早い時期に西洋の宣教師がカトリックの教えを広めようとして徐光啓の科学上の名誉と政治的な地位を利用しようと思図としたことを物語るものである。」（王重民輯校『徐光啓集』（上海古籍出版社、一九八四年）上冊、「凡例」、三十八頁）ということであった。

こうした見方は梁家勉においても見られる。例えば、彼の『新編徐光啓集』縁起」という文章の中の「3、収録不当」という箇所には、「有些作品、例如一部分像贊、箴贊等、内容無関要義、言之無物、本不可収録；有些作品、例如《正道提綱》、《与郷人書》等篇、從文義上、文体上、作風上看、都不類主親筆、是後人托名膺作、不応収録、但各本都濫入了。」（倪根金主編『梁家勉農史文集』中国農業出版社、二〇〇二年、四九八頁）とある。「耶穌像贊」、「聖母像贊」、「聖教規誡箴贊」は徐光啓の作とするだけの根拠がなく、「正道提綱」と「与郷人書」等は贋作であるというわけである。

王重民の示したこのような見解に対して、李天綱は一九六〇年代の学術界は反帝国主義、反侵略の意識が強烈であったので、王重民には徐光啓がローマ・カトリックの信者であることを前面に出さないようにする意図があったのかも知れないことを述べる（『跨文化的詮釈』、一九八頁）。

ところが、同じく李天綱によれば、一九八〇年代の徐光啓研究は重点を科学史、政治史の領域から文化史や宗教史の領域に移した（『増補説明』『増補徐光啓年譜』上海古籍出版社、二〇一一年、四頁）。こうした新しい研究動向の中で、李天綱は徐光啓がマカオへ赴いて神学教育を受け、初期の漢文の宣教文書の作成に関わったという見解を提出する（『造物主垂象略説』校釈）『跨文化的詮釈』、一九七頁）。

一般的に徐光啓の名が著訳者として冠せられた文章は彼本人

が関わったに違いない(一九九頁)。そのうち『造物主垂象略説』は、徐光啓が実際に関わった中国のカトリック教会の初期の宣教文書であったようである(一九七頁)。つまり、李天綱の論文の骨子は、徐光啓が『造物主垂象略説』の作成に関わったということである。ここではローシャが作者である可能性は取り上げられてはいない。

ここで全体を見渡してみると、Albert Chan の『ローマ・イエズス会文書館及び史料』の中の「本書はローシャによって口述され、徐光啓によって筆録されたことが考えられる。」(一八五頁)という論述が理に適用のものではないであろうか。

矢沢利彦先生のローシャについての「人名解題」には、「ポルトガルのブラガ教区に生まれ、一五八三年にイエズス会に入会。：一五九七年に韶州に派遣され、ついで一五九八年に南昌に赴き、：一六〇〇年南京に呼ばれ、：南京に留まった。かれはこの地にあつて：一六〇三年にはのちの大学士徐光啓を人教させた。：一六一六年の南京教案(沈淮による迫害)の際には江西省の建昌に脱れ、ここに信徒集団を育てることに成功した。：迫害がやみ、かれは総上長の職に昇任し、：七年後に杭州で死亡した。」(リッチ『中国キリスト教布教史』大航海時代叢書〔第二期〕八、岩波書店、一九八二年、六〇一頁)とあるように、ローシャは南京で徐光啓に洗礼を授けている。ローシャは徐光啓の人生の転軸に立ち会いそれを導いたのであつた。Chan が「二人の間には尽きる、このなご友情(a lasting

friendship)があつた。」(前掲書、一八五頁)と述べる所以である。

しかしそれならば、例えば『靈言蠡勺』が「畢方濟口授、徐光啓筆録」としているように、『造物主垂象略説』の場合も「羅如望述、徐光啓筆録」のように記されるべきではないであろうか。しかし同書には「徐光啓述」とあつても、「徐光啓筆録」のような語句はない。

本文は白話体で書かれている。文体は‘vulgar’というより‘colloquial’に近いのではないであろうか。というのも‘vulgar’は知識人に対する民衆の言葉を指し、一方‘colloquial’は文語に対する口語を指しているように思われるからである(C.F.C.O.D., 6th ed., p.197, p.1305)。それはカトリックの教えを当時のより広範な人々に分かりやすく口頭で伝えることを念頭に置いて作られたものであろうから、明末期の口語中国語の実相を伝える第一級の言語資料であると言つてもよいであろう。

大官の徐光啓が口述したとするのはやや不自然のようにも思われる。ローシャが口頭でカトリックの教えを伝えるために作成したものを徐光啓が読み、これを人々に推奨したということも考えられないであろうか。その背後にはローシャの語ることを聴きながら、当時の標準的な白話に直す人たちの存在があつたことであろう。この人たちこそ「聖職者および修道者以外の、専門職として要理教育に携わる人々」(高柳俊一「カテキスタ」研究社『新カトリック大事典』第一巻、一一一〇頁)であると

ころの「カテキスタ」(catechista)と呼ばれた者ではないであろうか。「…彼らが特に重要な役割を果たしたのは、十六世紀以後、宣教地においてである。ヨーロッパから福音を宣教するためにアフリカ、アジア、オセアニアに赴いた宣教師たちは、現世の男女信徒のなかから多くの協力者を選び、彼らを養成し、信者共同体の指導要理教育などを彼らに委ねた。」(同頁)とあるように、カテキスタは宣教師と共に宣教対象の民衆の中に入って宣教を推進する重要な働きをしたのである。

『造物主垂象略説』の作成には宣教師のローシヤとカトリック土人の、徐光啓に加えて少なからぬカテキスタが関わったのではないかと考えてみたいのである。作者を「耶穌會士」とする版と「徐光啓」とする版が並存するわけは、「耶穌會士」でも「徐光啓」でもないところの歴史に名を残さぬ中国の市井の宣教の徒がいたからに違いないと思われるのである(続)。

付記一

フィステルの著書の中に出て来るポルトガル語についてオペレート会のジェニヴァウド Genivaldo 神父様からご教示をいただいた。その他、クーランの目録についてもご教示をいただいた。記して感謝するものである。

また、Monumenta Serica の編集長をされておられる神言会の Zbigniew 神父様にはベルリン国立図書館に所蔵されている「造物主垂象略説」のインターネットでの公開の情報を提供して

いただいた。記して感謝するものである。

加えてローマのイエズス会文書館の González 神父様と職員 of Mauro Brunello さんには資料の画像の送付の件で一方ならぬお世話になった。記して感謝するものである。

更に、愛知大学名古屋図書館の職員の方にはパリ国立図書館所蔵の漢籍のインターネットでの公開の情報を提供していただくなど大いに助けられた。記して感謝するものである。

付記二

一橋大学図書館には「明清期天主教文献」という名前でパリ国立図書館所蔵の漢籍のマイクロフィルムが所蔵されている。受け入れの一連の手続には職員の故諸澤菊雄氏が随分と労を取られたようである。今回この資料のお世話になった。記して感謝するものである。

また四月の最初の頃、民衆思想史研究の安丸良夫先生が旅立たれた。演習に参加させていただいたこともある。思想史研究の方法について啓発させられるところ、今に至るまで大なるものがある。満腔の謝意を表したい。

追記一

クラブロートについては高田時維「クラブロート」(『東洋学の系譜 欧米篇』(大修館書店、一九九六年、二十三頁―三十五頁)に詳細な評伝があった。評伝に言及してある(三十五頁)ヴァルラーフェンスのモノグラフは Hartmut Walravens, Julius Klapproth (1783-1835) *Leben und werk*, Harrassowitz, 1999 及

『Julius Klapproth (1783-1835) Briefe und Dokumente, Harassowitz Verlag, 1999』のことになるであろう。後者の一三六頁には「天主聖像略説」という漢文が手紙に出現する。該当する前後の箇所の独文につき神言会の Zbignew 神父様にご教示をいただいた。記して感謝す。ただ内容は拙文と直接関係するものではなかった。また評伝に挙げられた石田幹之助『歐人の支那研究』（共立社、一九三二年）のクラブプロットに関する箇所は二四四頁―二六二頁であった。高田氏の評伝には教えられるところ大であった。）

追記二

拙文を書き終える前日の四月二十九日に Ad Dudink 氏の論文 “The Image of Xu Guangqi as Author of Christian Texts” (*Statecraft & intellectual renewal in late Ming China—the cross-cultural synthesis of Xu Guangqi (1562-1633)*, Brill, 2001年, p. 99-p. 152) の一部に目を通し、その高度な中味に息を呑み圧倒されそうになった。拙文の問いへの答えともいえるべき内容であることを予感させた。その後、全体に目を通し、その感を深くした。許されれば、次の機会に Dudink 氏の論文を取り上げさせていただきたく思う（八月九日）。